

康熙雍正時代における上海・寧波の沿海航運

松 浦 章

要 旨

康熙23年（1684）の「展海令」の発布によって、中国沿海の航運が隆盛し、海外貿易を発展させたことは近年の成果で知られるようになってきた。この展海令以降の中国沿海の航運の活動を進捗させたのは、中国帆船の活動である。とくに福建などで建造された尖底型の海船である鳥船や長江口で発展した平底型の帆船である沙船などの帆船による航運が、沿海の航運活動を活発化させ、沿海を中心とする遠距離航運が展開し、沿海航運による物資の流通も大いに進展したのである。しかし、その具体的な状況については未だ十分に解決されているとは言えない。

そこで本論文では、とくに江南の上海や寧波における航運状況を中心に日本側の史料を参考に沿海貿易の姿を具体的に述べてみたい。

キーワード：清代 展海令 上海 寧波 沿海航運 日本史料

1 緒 言

清代における康熙23年（1684）の「展海令」の発布は、中国沿海の航運を隆盛させ、中国帆船の海外貿易を発展させたことはよく知られている¹⁾。とくに沿海航運を活発化させたのは、長江口で発展した平底型の帆船である沙船や、福建沿海などで建造された尖底型の海船である鳥船などの帆船による航運に起因するところが多い²⁾。

特に康熙末から雍正時期に至る厦門と天津との航運については香坂昌紀³⁾、

Ng Chin-keong⁴⁾によって詳細に検討されてきた。

「展海令」發布からほど近い康熙27年(1688)序の葉夢珠の『閩世編』卷三、建設には康熙年間中期の沿海、海外貿易の事情の一端が記されている。

上海之有樞關，始於康熙二十四年乙丑。關使者初至松，駐筭滬關，後因公廩窄陋，移駐呂城。往來海舶，俱入黃浦編號。海外百貨俱集，然皆運至吳門發販，海邑之民，殊無甚利，惟呂商有願行貨海外者，較遠人頗便。大概商於浙，閩及日本者居多⁵⁾。

康熙24年(1685)に上海に四海関の一つ江海関が設置され、船舶の往来が盛んとなり特に上海から浙江や福建沿海そして日本への航運が増加したと指摘しているが、具体的なことは不明である。このように康熙年間後期における江南を中心とする沿海航運が具体的にどのように展開したかについては詳細に検討されていない。

そこで本稿では、「展海令」以降の上海、寧波などの江南の海港の沿海貿易がどのように展開していたかを明らかにしてみたい。

2 「展海令」以降の沿海航運

康熙24年(1685)以降の展海令の施行によって、沿海の貿易が進展するとどのような状況になったかについて、張伯行『正誼堂文集』卷一に、康熙50年(1711)の「海洋被劫三案題請敕部審擬疏」に次のように見られる。

内稱、康熙四十九年閏七月十九日、據本縣(上海縣)船戶張元隆呈稱、有自造貿易沙船一隻、領本縣上字七十三號牌照、於本年六月初六日、裝載各客布疋・磁器・貨值數萬金、從海關輸稅、前往遼東貿易。六月十九日、行至山東文登縣界馬島嘴地方、遇賊烏船兩隻、吶喊揚帆、與隆船相近、斯時幸有隨帶護船炮火、連發兩門、賊不敢逼、彼此相持、兩晝夜。…

内稱、據華亭縣船戶張永昇呈稱、身領華字九十號縣照、及江南海關部牌、攬裝茶葉・布・碗等貨、在本關輸稅、於本年八月二十日、前往關東貿易、因風汛不順、停通州廖角嘴地方、於九月十八日、遇賊駕烏船八隻、放炮鳴鑼、上船行劫、搬去布・碗胡・椒紙爆并護船炮・關牌縣照、及頭桅蓬錨杉

板一隻、擄去水手馬祖一名拘留、昇船直至十月初六寅夜逃回等情。又據上海縣呈報被擄水手馬祖、於康熙四十九年十一月二十七日、赴縣稟報、身係張永昇船上水手、在廖角嘴、遇賊被捉過船、至十月二十八日、在福建福寧州地方、釋放登岸。同伴一人曹三稱、係崇明縣人。亦在客船被擄同至蘇州分路祖於今二十六日到家伏乞賜報等情。訊據供稱賊是福建土音、在盡山見有客船放船追趕不曉得賊姓名約有六百餘人。…

上海縣の船戸である張元隆が自己所有の沙船によって東北沿海地域との交易を行おうとしていた。自己の沙船に「布疋・磁器」など數萬金に相当する貨物を積載して上海を出港している。ところが山東半島近海で海盜の烏船2艘に遭遇したのであった。また華亭縣の船戸張永昇も「茶葉・布・碗等貨」を積載して東北沿海の貿易に赴く途上に、海盜の烏船8隻の襲撃を受けて被害を蒙っている。

このように、上海から東北沿海への航運が展開されていたと同時にその商船を襲撃する海盜が出没していたのであった。この襲撃した烏船こそは福建を中心とする沿海で建造された尖底型の海船であった。

康熙56年（1717）7月1日付の總督管理直隸巡撫事務趙弘燮の奏摺に天津に入港した福建からの商船の記録が見られる。

本年陸月拾伍日、有福建泉州府晉江縣雙桅洋船壹隻、發字壹千壹百參拾陸號、船戸陳順興、水手拾玖名、裝載客貨粗碗壹萬伍千箇、白糖伍百簍、糖菓貳拾肆桶、冰糖參桶、竹筴貳拾陸把、魚翅大小伍伍捆、烏糖肆簍、水手帶碗壹萬箇。又有福建泉州府晉江縣雙桅洋船壹隻、發字壹千伍百貳拾捌號、船戸蔡興利、水手拾玖名、裝載客貨伍百拾簍、冰糖貳拾桶、糖菓肆桶、粗碗壹萬箇、粗小碗伍千箇、魚鰾壹捆、部牌縣照各壹張、客人貳名侯世英・黃朝瑞等情。…⁶⁾

康熙56年6月15日に天津に入港した「雙桅洋船」は福建泉州府晉江縣に属する帆船であった。この船には「粗碗壹萬伍千箇、白糖伍百簍、糖菓貳拾肆桶、冰糖參桶、竹筴貳拾陸把、魚翅大小伍伍捆、烏糖肆簍、水手帶碗壹萬箇」などの貨物が積載されていた。同様に天津に入港した「雙桅洋船」も晉江縣籍の帆

船で、「冰糖貳拾桶，糖菓肆桶，粗碗壹萬箇，粗小碗伍千箇，魚鰾壹梱」などの貨物を積載して，福建から天津に来航したのであった。

雍正元年（1723）8月15日付の戸部尚書田從典の奏摺に，

今天津亦有福建海船，偶聞會試舉子，竟有隨海貨船，而至者，臣因之有感矣。夫海客所圖者利耳。伊既可以販貨，何不可以販米，大約海貨一倍，常得數倍之利，滋者派官買米，除米價外，…⁷⁾

とあるように，北京において開催される科挙の會試に参加する人物が福建から天津に来航した海船に搭乗してきた事例が見られる。

雍正3年（1725）4月30日付の江蘇巡撫張楷の奏摺に，

上海一關，僻處巖疆，界連海面出口之處甚多⁸⁾

と見られるように，上海常関は各沿海地域への窓口として幅広い交易圏を包含していた。

雍正4年（1726）4月26日付の浙江定海総兵官の張溥の奏摺に，

查驗所有內地洋船，向奉嚴禁只往東洋貿易，商人李正春・魏聿洪・吳士憲等皆請領銅價前往東洋，安南買者少，偷越呂宋・噶囉巴・西洋一帶地方者多，每年于拾貳月，正月，或由上海，或定海掛號出洋，至陸月，柒月回棹，亦有收入上海亦收入定海。奴才自到任以來雍正貳年到有拾貳隻，雍正參年到有柒隻，驗其載回貨物，俱係燕窩・丁香油・哆囉呢・羽毛緞等項，並無銅觔，查得此項洋船，偷越西洋已久，今雍正肆年由定海出洋，計有捌隻，普陀汛出洋有柒隻，共拾伍隻，稱東洋尚未回到⁹⁾。

とあり，浙江定海総兵官の張溥によれば，毎年旧暦の十二月から正月にかけて上海や定海から出港し，六月，七月に帰帆する外洋商船の多くが日本へでかけ，なかには呂宋や咬囉吧へ行く船もあった。雍正2年（1724）1年間で12隻が，雍正3年に7隻の海船が海外に赴き帰帆し，雍正4年には定海から8隻が出港していたことが知られる。これらの商船には海外から燕窩すなわちツバメの巣や丁香油などの東南アジア産の物産の他に，おそらく呂宋や咬囉吧に来航する西欧船と交易したと考えられる毛織物の哆囉呢や羽毛緞が積載されていた。

雍正4年8月4日付の山東巡撫陳世倌の奏摺に，

查勘海疆見東三郡（青・萊・登三府），環山沿海地方，土性磽瘦，種豆之處，十居六七，每年江蘇・天津等處客商載貨來東，率多買豆，由內洋運回，售於腐店・油坊，兼以製餅肥田，所用甚廣，非若販糶麥，以爲燒酒晒麴，妄費無益者，比而本地山路崎嶇，車運艱難，不能載往他郡銷售，全賴出海，流通民間，正藉此項糶糴，上之以辦國課，下之以資日用¹⁰⁾。

とある。雍正4年（1726）当時の山東沿海では，山東産の大豆等の豆類を求めて，江蘇や天津からの海船が来航して大豆類を購入し，豆腐店に売却して豆腐に製造し，油坊に売却されて大豆油などに加工され，搾り粕は豆餅として土地の肥料に利用されるなど，豆類の用途は多岐にわたっていた。これら豆類は，山東内陸の陸路は輸送に不便であるため沿海の海路が恒常的に利用されていたのであった。

雍正6年（1728）12月5日付の江南松江提督總兵官栢之蕃の奏摺に山東に來航する船舶について次のようにある。

山東亭子蘭地方有鳥船貳隻，停泊海面，形跡可疑，…查得前項兩船，壹船戶金隆順係福建泉州府同安縣人，壹船戶張炳係浙江寧波府鄞縣人，俱各領有本縣照票，常往膠州貿易，有牙行王源盛等與之熟識已久，今金隆順之船於雍正陸年陸月參拾日，在寧波府鎮海關掛號，空船出口，張炳之船，於雍正陸年柒月初貳日，在廣東虎門汛掛號空船出口，俱往膠州置貨，因於柒月貳拾參日，在山東亭子蘭洋面，遇風停泊，離岸約遠拾餘里，該汛防兵，以本非泊船之所，奸良莫辨。…¹¹⁾

山東沿海に出没する船舶には福建泉州府のものや，浙江寧波など山東よりはるか以南の沿海部から來航したもので，その來航目的には膠州湾内の東北部湾岸に位置する膠州との交易にあったようである。

以上のように，沿海活動に関して康熙時代の後半より，官吏の奏摺などに若干であるが記録されてくるようになる。

3 康熙雍正時代の上海・寧波の沿海航運

上記の中国官吏の奏摺などの記録以外に，日本の同時代の記録から沿海の状

況を見てみたい。まず康熙末から雍正時代の日本に相当する時代は、徳川8代将軍吉宗の時代で、享保元年が康熙55年（1716）そして雍正末の雍正13年が享保20年（1735）に当たる。この時期に相当する享保3年（康熙57, 1718）から享保13年（雍正6, 1728）に長崎に来航した中国船を整理すると次の表1になる。これらの唐船は長崎では「厦門船」などの来航地の地名で呼ばれたが、ここでは中国の港を離港した最終の港名で整理した¹²⁾。

表1 18-1728年長崎来航唐船の出港地別一覧

西暦	中国暦	日本暦	咬囉吧	暹羅	東埔寨	占城	廣東	厦門	温州	乍浦	普陀山	寧波	上海
1718	康熙57	享保3		1			1	1	1	3		9	26
1719	康熙58	享保4		1						3		8	15
1720	康熙59	享保5						2				6	23
1721	康熙60	享保6						2				3	15
1722	康熙61	享保7						2			1	11	14
1723	雍正元	享保8		1	1	1	1				1	12	13
1724	雍正2	享保9										2	1
1725	雍正3	享保10					1					5	4
1726	雍正4	享保11	1									4	4
1727	雍正5	享保12									4	4	7
1728	雍正6	享保13										1	2
合 計			1	3	1	1	3	7	1	6	6	65	124

享保3年（1718）から享保13年（1728）までの11年間に218隻が来航した。それらを港別のグラフにすると図1になる。

地名	咬囉吧	暹羅	東埔寨	占城	廣東	厦門	温州	乍浦	普陀山	寧波	上海
隻数	1	3	1	1	3	7	1	6	6	65	124
割合	0.5	1.4	0.5	0.5	1.4	3.1	0.5	2.7	2.7	29.8	56.9

図1から明らかなように、この時期の長崎来航唐船数は、上海が半数以上の約60%近くを占め、寧波が30%と他の地域を圧倒していた。とりわけ上海、寧波、乍浦、普陀山を含めた江南地域からの唐船のみで201隻にのぼり、全体の92%に達しているのである。

康熙雍正時代における上海・寧波の沿海航運（松浦）

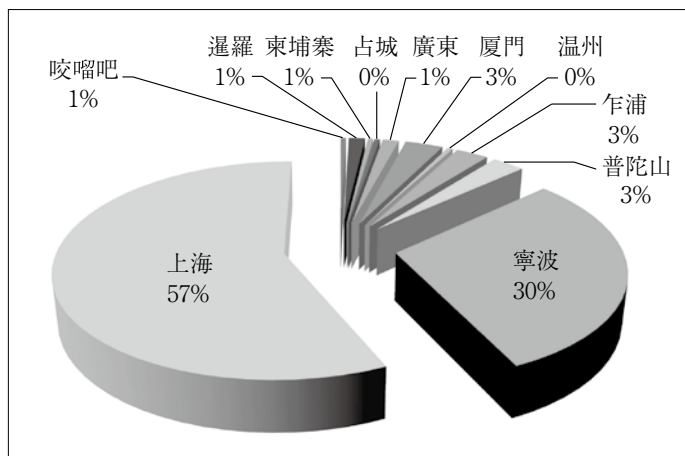


図1 1718-1728年長崎来航唐船漢別隻数

上海、寧波、乍浦、普陀山の江南地域からの唐船に限定したグラフが図2である。この時期になるとそれまでの中国大陆の沿海各地から来航していた唐船が、江南地域に限定されていく傾向が如実になり、特にそれまで無名に近かった上海が目される港になっていくことがわかる。少なくとも康熙40年（元禄14, 1701）の頃では、中国から日本に向かう商船は、

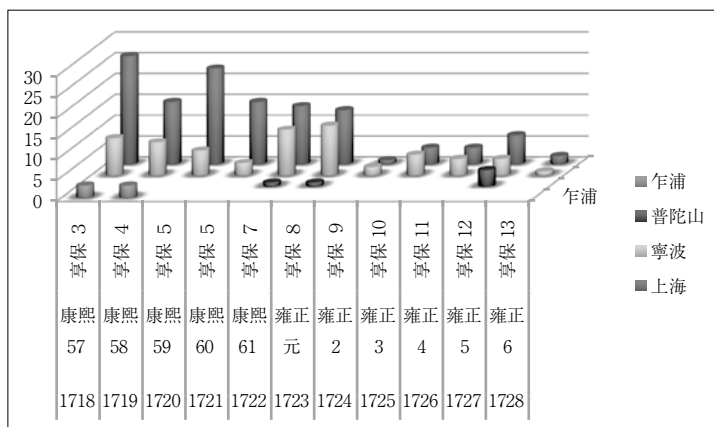
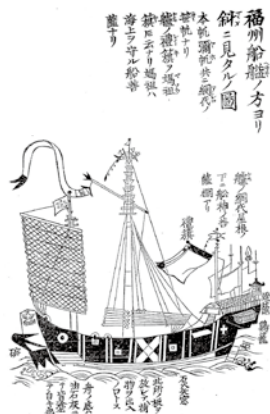
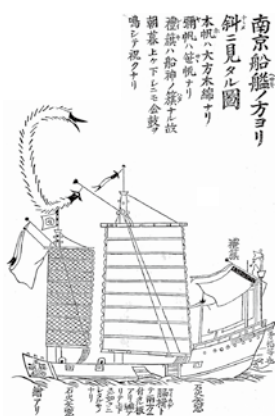


図2 1718-1728年江南地域来航唐船数

平底型海船：沙船

尖底型海船：鳥船



從寧波出海，商舶頗多，似有招搖，議從上海出去，隱僻爲便¹³⁾。

と指摘されたように，寧波に対して上海は対日貿易の商船の出港地としては無名に近かったのであった。

ところが，それから10年後には上海は対日貿易船の出港地として最大の港になっていたのである。このため康熙末から雍正時代にかけての日本の長崎貿易の記録には，江南地域の事情に関するものを伝えた風説書が多々見られ，それらの一端から，この時期の江南地域の沿海貿易の事情を探ってみたい。

1) 上海の沿海航運

享保2年（康熙56，1717）10月6日に長崎に来航した3番廣南船は，正徳6（享保元年）にも長崎に来航し貿易を終えて帰帆したが，廣南へは帰港せず，上海に入港し，「廣南出產之荷物少々積添」¹⁴⁾と，廣南において生産された貨物を少量積載してとあるように，少量ではあったが上海において集荷した廣南産の物資を積載して長崎に廣南船として来航している。

享保12年（雍正5，1727）6月21日に長崎に来航した21番廣南船は，「南京之内上海におゐて廣南出產之荷物積添」¹⁵⁾と上海において廣南産の産物を集荷

し積載して長崎に入港した。

享保2年11月8日に長崎に来航した37番臺灣船の場合は、享保2年4月6日に長崎から帰帆し、直接に上海へ寄港し、停船して「彼地（上海）にて臺灣出產之荷物買調」¹⁶⁾とあるように、上海において台湾産の産物を購入し、それらを積載して長崎に来航したのであった。享保3年（康熙57, 1718）の11月21日に長崎に入港した34番臺灣船は、享保2年に長崎に来航し交易して、享保3年6月12日に長崎から帰帆したが海難に遭遇して山東沿海に入港し、船舶を修復して9月15日に上海港へ入港し、「於上海臺灣出產之荷物相調」¹⁷⁾とあるように、上海において台湾産の物資を購入して長崎へもたらしめている。

享保3年（康熙57, 1718）閏10月5日に長崎に入港した29番厦門船は、享保2年に長崎で交易し、5月29日に長崎から帰帆し厦門には帰港せず、上海に入港して停船し、

上海より船を仕立、厦門へ遣し、厦門出產之荷物相調、此度唐人數四拾七人乗組候て、…¹⁸⁾

とあるように、上海より船を派遣して厦門に送り、厦門において産物を準備し、厦門船は上海に停泊していた。厦門産の物資を、上海から船を派遣して厦門に行かせ、厦門において購入した物資を上海に運ばせ、その物資を29番厦門船が搭載し乗員47名が搭乗して長崎に来航している。同年12月12日に長崎に入港した35番厦門船は、享保2年に長崎で交易して享保3年6月2日に長崎から帰帆したが、海難に遭遇して山東沿海に入港した。その後9月19日に上海へ入港し、「於彼地（上海）厦門出產之荷物取寄せ」¹⁹⁾とあるように上海において厦門産の物資を集荷し、その貨物を積載して長崎に来航している。享保4年（康熙58, 1719）12月3日に上海から来航した34番厦門船の積荷は、「兼て厦門出產之荷物相調召置申候」²⁰⁾とあるように、上海において厦門産の物資を集荷したものであった。同じく35番厦門船は、「上海より厦門へ小船を遣し、彼地出產之荷物取寄」²¹⁾とあるように、上海から小型船を派遣して厦門において購入した貨物を積載して長崎に来航している。

享保5年（康熙59, 1720）6月19日に長崎に来航した18番厦門船は、享保4

年春に長崎に来航して交易し、同年冬に帰帆し厦門へ帰港する予定であったが逆風に遭遇して、厦門への帰帆が困難となり上海へ入港し、「於彼地（上海）厦門出產之荷物少々相調」²²⁾として上海で厦門產の産物を少量購入して再び長崎に入港したのであった。

享保8年（雍正元，1723）6月7日に長崎に来航した5番厦門船は、

南京之内上海におゐて、厦門出產之荷物積添、唐人數五拾人乗組候て、當六月朔日上海致出帆渡海仕候²³⁾、

と見られるように、南京（江南）の上海において厦門出產の荷物を積載し、乗員50人が搭乗し、6月1日に上海を出帆し長崎へ渡海してきた。上海において厦門產の産物を調達して日本へ渡ってきたのであった。

享保2年（康熙56，1717）の32番廣東船も同様なことをしている。この船も正徳6（享保元年）にも長崎に来航し貿易を終えて帰帆したが、廣南へは帰港せず、上海に入港し、長崎で交易した貨物を上海で売却し、停泊して、上海において「廣東出產之荷物少々積添」²⁴⁾とあるように、廣東產の貨物を購入し積載して長崎に来航した。享保3年12月12日に長崎に入港した37番廣東船は、享保2年に長崎に来航して交易し、享保3年6月11日に長崎から帰帆した。しかし海難に遭遇したため廣東には帰帆せず、上海に入港して、「彼地（上海）にて廣東出產之荷物相調」²⁵⁾と、上海において廣東產の物資を購入し積載して、37番廣東船として長崎に入港したのであった。

享保5年（康熙59，1720）2月1日に長崎に入港した1番廣東船は、享保4年に長崎に来航して、7月22日に長崎から廣東へ帰帆する予定であったが、悪風のため8月27日に上海に入港して停泊し、「銅并俵物賣拂、其後廣東出產之荷物買調爲申」²⁶⁾と、上海において長崎で交易して得た銅や海産物を売却し、さらに上海で廣東產の物資を調達して長崎に来航したのであった。

享保5年6月27日に長崎に来航した26番廣東船は、「南京之内於上海、廣東出產之荷物買調」²⁷⁾とあるように、上海において廣東產の物資を購入し、それらを積載して長崎に入港している。

享保12年（雍正5，1727）3月15日に長崎に来航した9番廣東船は、「南京

之内上海におゐて廣東出產之荷物積」²⁸⁾とあるように、上海において廣東產の物資を集荷し積載して長崎に来航している。

享保3年12月17日に長崎に来航した38番咬啗吧船は、享保2年に長崎に来航して交易を終え、享保2年2月6日に帰港するが、直ちに寧波に入港した。その後、10月初旬に上海へ至り、「於彼地（上海）咬啗吧出產之荷物相調」²⁹⁾とあるように、上海において咬啗吧出產の物資を購入し、それら搭載して長崎に来航している。

享保3年12月25日に長崎に来航し、翌年分の享保4年子1番船となった咬啗吧船であるが、同船は享保2年12月に長崎に来航し交易を終えて8月8日に長崎から帰帆したが、上海に入港し停泊していた。そして「於彼（上海）咬啗吧出產之荷物少々相調」³⁰⁾とし、上海において咬啗吧の產物を少量であったが調達し、それを積載して長崎に来航したのであった。

享保10年（雍正3, 1725）正月11日に長崎に来航した2番咬啗吧船は、上海から出港してきた³¹⁾。上海において咬啗吧產の物資を積載して来たとと言える。同様な例は同年の4番占城船も上海から長崎に来航してきた³²⁾ように、上海におゐる占城產の物資を集荷し積載してきたのであった。

享保13年（雍正6, 1728）5月28日に長崎に入港した10番暹羅船は、「南京之内上海におゐて暹羅出產之荷物積添」³³⁾とあるように、上海において暹羅國產の物資を集荷し、それを積載して長崎に来航した。

以上のように上海において廈門や東アジアの產物が集荷できたのである。

2) 寧波の沿海航運

享保2年（康熙56, 1717）8月21日に長崎に来航した7番廣東船は寧波から長崎に来航したが、その際の日本への積荷は寧波において「於彼地（寧波）廣東出產之荷物相調申候」³⁴⁾と、廣東船として長崎に来航するが、事實は寧波から長崎に入港した。廣東產の積荷を寧波で準備して搭載したことが知られる。

享保5年（康熙59, 1720）3月21日に長崎に入港した3番廣東船は、享保3年に長崎に来航して交易を終えて12月24日に長崎から帰帆するが、悪風に遭遇

して享保4年正月に寧波に入港し滞船していた。その間に、

彼地(寧波)より船を仕立、廣東へ遣し、出產之荷物相調、寧波へ積廻し、
御當地(長崎)へ渡海之支度仕、去年七月に寧波致出帆³⁵⁾、

とあるように、寧波において船を傭船して廣東へ派遣し、廣東において産物を調達し、寧波へ輸送し、長崎へ渡航する準備を整えて、昨年7月に寧波を出港した。廣東産の物資を集荷するために、寧波から廣東へ船を遣わして廣東省の産物を購入することが可能であり、その産物を積載し長崎に来航したのであった。

享保2年8月24日に長崎に来航した8番咬啗吧船は、正徳6(享保元年)に長崎より帰帆したが、寧波に寄港したところ、寧波において咬啗吧からの貿易船が帰港していた。

去年寧波より咬啗吧へ参り候商船三艘、當七月に寧波へ歸着仕候、則此船に咬啗吧出產之荷物積渡候を、私共船に積載せ、唐人數五十五人乗組候て、當月六日寧波より致出船、日本之地何國へも船寄せ不申、直に今日入津仕候³⁶⁾。

と、昨年寧波より咬啗吧へ赴いた商船が3艘、康熙55(1716)7月に寧波へ帰帆し、この咬啗吧船には咬啗吧の産物が積載されていた。そこで長崎への船にそれらを積み換え、乗員55名が搭乗して、八月六日に寧波より出港し、日本の他の地に寄港することなく、直ちに本日(8月24日)に入港した。すなわち寧波で見られた咬啗吧船から咬啗吧出產の荷物を購入し、その品々を積載して長崎に咬啗吧船として来航したのであった。

享保2年9月25日に長崎に入港した14番厦門船は、享保元年に長崎での貿易を終えて帰帆するが、厦門に帰港せず、寧波に入港した。

寧波へ乗入滞船仕、小船を借り厦門へ遣し、彼地(厦門)出產之荷物相調、寧波へ輸送仕候を積乗せ、當月廿日唐人數四拾四人乗組候て、彼地(寧波)致出船渡海仕候³⁷⁾。

この厦門船は寧波へ入港して停泊し、小型船を雇傭して厦門へ派遣し、厦門で厦門地方の産物を購入し、寧波まで輸送して、それらの荷物をこの厦門船に

搭載し、9月20日に乗員44名とともに寧波から出港した。寧波で別の船を雇傭して廈門へ行かせ、廈門で廈門地方の産物を購入し、廈門から寧波へ輸送した貨物を、この廈門船に積載して長崎に来航したのであった。同様の例は同年の15番廈門船の場合にも見られる。この船も長崎から廈門に帰帆せず、寧波に寄港し、寧波で「廈門出産之荷物、寧波へ輸送仕候を積乗せ」³⁸⁾とあるように、廈門から寧波へ輸送されてきた廈門産の貨物を積み換えて長崎に来航したのであった。

享保3年（康熙57, 1718）9月5日に長崎に来航した26番廣東船は、同年正月21日に長崎から帰帆し、2月1日に寧波に入港して、寧波で日本から貿易品を売却し、さらに寧波で「廣東出産之荷物買調申候」³⁹⁾として、寧波において廣東産の物資を調達して、同船に積載して長崎に来航したのであった。同年12月17日に長崎に来航した39番廣東船は、

南京之内上海におゐて、廣東出産之荷物相調、唐人數四拾九人乗組候て、
當月朔日に彼地出帆仕致渡海候處、

とあるように、江南の上海において廣東出産の物資を購入し、乗員49名が搭乗して、12月1日に上海を出港した。上海において廣東産の物資を購入して長崎にもたらした。

享保10年（雍正3, 1725）6月4日に長崎に入港した13番廣東船は、「浙江之内寧波にて仕出し」⁴⁰⁾とあるように、廣東産の物資を寧波において集荷して日本へ来航している。

享保8年（雍正元, 1723）12月9日に長崎に来航した24番臺灣船は、同年7月に長崎から帰帆し、寧波に帰港して、

彼地（寧波）にて船を仕立、臺灣へ遣し、出産之荷物買調候て、普陀山へ積廻し、其外端物等の荷物少々積添、唐人數三拾八人乗組候て、當十一月廿五日普陀山出帆⁴¹⁾、

とあるように、寧波において船を傭船して台湾に遣わし、台湾で台湾産の物資を購入し、普陀山に回航して、普陀山では織物などの荷物を少量積載し、乗員38人が搭乗して、11月25日に普陀山から出帆してきた。寧波から船を台湾に遣

わし、台湾産の産物を購入して来たその積荷を普陀山で積み込んで長崎に来航している。日本へ赴く風待ちの地として普陀山を利用している。

享保11年（雍正4，1726）12月12日に長崎に入港した38番東京船は、
浙江之内寧波におゐて東京出産之荷物積添、唐人數五拾三人乗組候て、當
十一月十九日彼地致出帆⁴²⁾、

とあるように、浙江の中の寧波において安南の東京産の物資を積載し、乗員53人が搭乗して、11月19日に寧波を出帆してきた。寧波において安南の東京において産出された物資を積載して長崎に来航している。享保11年（雍正4，1726）12月24日に長崎に来航した38番東京船も、「浙江之内寧波におゐて東京出産之荷物積添へ」⁴³⁾と、寧波で東京産の物資を集荷している。

以上のように寧波においても厦門や東南アジア産の物資の集荷が可能であった。

1) 乍浦の沿海航運

享保10年（雍正3，1725）2月2日に長崎に入港した5番東京船は、「寧波之内乍浦にて仕出し渡海候」⁴⁴⁾と、この東京船は、浙江省嘉興府平湖縣にある乍浦において東京産の物資を調達して長崎に来航している。同様な例は、同年の7月21日に長崎に来航した17番東京船であり、同船は「寧波之内乍浦にて仕出し」⁴⁵⁾と、乍浦で東京産の産物を集荷した船であった。

享保10年6月29日に長崎に入港した15番廣南船は、「寧波之内乍浦にて仕出し」⁴⁶⁾とあるように、乍浦で廣南産の物資を集荷して搭載して長崎に来航したのであった。

享保11年（雍正4，1726）12月27日に長崎に来航した41番厦門船は、

寧波之内乍浦におゐて厦門出差之荷物積添へ唐人數四拾六人乗組候て、當
月八日彼地致出帆⁴⁷⁾、

とあるように、寧波の乍浦において厦門産の貨物を積載し、乗員46人が搭乗して、12月8日に乍浦を出帆した。この厦門船は浙江省嘉興府平湖縣下の乍浦鎮にある乍浦港において厦門産の物資を購入して船に積載して長崎に来航したの

であった。

また享保11年の42番廣東船も、乍浦で廣東産の物資を集荷している。

寧波之内乍浦におゐて廣東出差之荷物積添へ、唐人數五十人乗組候て、當月十日彼地出帆⁴⁸⁾、

と見られるように、寧波とあるが浙江省のことを言ったのであろう。その浙江省の乍浦において廣東産の貨物を積載し、乗員50人が搭乗し、12月10日に乍浦を出帆した。乍浦で廣東産の物資が調達できたのであった⁴⁹⁾。

このように乍浦においても厦門や東南アジア産の物資の集荷ができた。

2) 舟山・普陀山の沿海航運

享保7年（康熙51, 1722）7月28日に長崎に入港した17番廣東船は、

浙江之内舟山より船を仕立、廣東へ遣し、出産之荷物相調、舟山へ積廻し、彼地にて船支度仕、唐人數五拾貳人乗組候て、當六月廿日舟山致出船、
...⁵⁰⁾

とあるように、浙江省東北沿海に位置する舟山群島の舟山島の舟山より船を準備し廣東へ派遣して廣東で廣東省産の物産を集荷して、それらを舟山へ輸送し、舟山で日本への貿易船を準備し、乗員52名が搭乗して、6月20日に舟山を出帆した。この廣東船は帰帆地である廣東へ帰港せず、舟山で別の船を雇傭して廣東へ派遣して廣東から廣東省産の物資を購入し舟山に帰港して、その雇傭船の積荷を積み換えて日本へ来航したのであった。

享保8年（雍正元, 1723）7月4日に長崎に入港した14番廣東船は、

廣東荷物相調爲申、去冬普陀山より船を仕立、廣東へ遣し、彼地におゐて出産之荷物相調、普陀山へ差廻申候を積乗せ、唐人數五拾四人乗組候て、當六月廿六日普陀山出帆致渡海候⁵¹⁾、

と、廣東の物産を準備するため、前年の冬に普陀山において船を準備して廣東へ派遣し、廣東において廣東産の物資を調達し、普陀山へ輸送し、普陀山で積み換えて、乗員54名が搭乗し、6月26日に普陀山から出港し長崎へ来航してきた。この廣東船は、船自体は廣東へ帰帆せず、別の船を雇傭して廣東へ行かせ

て廣東の物産を購入し普陀山に戻り、普陀山でこの廣東船に積載して普陀山から出港してきた。普陀山において南の廣東の産物を調達している。

享保12年6月6日に長崎に入港した19番廣東船は「浙江之内普陀山におゐて廣東出産之荷物積添へ」⁵²⁾と、普陀山で日本への積荷を調達している。

享保12年（雍正5，1727）5月4日に長崎に来航した11番咬嚙吧船は、「浙江之内普陀山におゐて咬嚙吧出産之荷物積添」⁵³⁾とあるように、浙江省の舟山群島の普陀山において咬嚙吧産物を購入して船に積載して長崎に来航した。

享保12年6月20日に長崎に入港した19番廣東船は、「浙江之内普陀山におゐて廣東出産之荷物積添」⁵⁴⁾とあるように、舟山群島の普陀山において廣東産の物資を集荷し、それを積載して長崎に来航した。

享保12年6月21日に長崎に入港した21番廣南船は、「浙江之内普陀山におゐて廣南出産之荷物積添」⁵⁵⁾とあるように、普陀山において安南の廣南産の物資を集荷し、それを積載して長崎に来航した。

享保12年6月21日に長崎に入港した22番東京船は、「浙江之内普陀山におゐて東京出産之荷物積添」⁵⁶⁾とあるように、普陀山において安南の東京産の物資を集荷し、それを積載して長崎に来航した。

このように舟山群島の舟山や普陀山でも南方の沿海地域からの貨物の集荷が可能であった。

4 小 結

康熙中期より沿海及び海外への航運が極めて活発化し、沙船や鳥船による帆船の活動が中国大陸沿海のみならず海外などへも広範囲に展開していた。その具体的事実を明らかにする記録は多くは無い。

しかし、同時期に江南地域から海外への航運として注目された日本の長崎貿易に関する記録の一端に、中国沿海や海外貿易に関する帆船の動向を具体的に示す記録の一端が残されていることは明かである。東南アジアや廣東、福建から日本の長崎を目指した貿易船の中には、上海や寧波そして乍浦さらに舟山群島の舟山や普陀山などに寄港して、貨物の積み卸しなどを行い、江南以南の出

港地の貨物のみならず他の港からもたらされた貨物も積み込み日本へ赴いた。その背景として中国大陆の沿海貿易が極めて積極的に展開されていたことがわかる。また長崎貿易を終えて帰帆した中国帆船は、長崎から帰帆するに際し、江南の諸港に寄港し、日本産の貨物の一部を江南の諸港において売却していた。すなわち、長崎から直接に華南や東南アジアに帰帆せずに江南沿海に寄港して後に華南や東南アジアなどへ帰帆するなどの航運を行っていた。

上述のように、清代の中国帆船の多くは、出港地から目的地に航行して貿易する直線的交易形態ではなく、出港地・寄港地・目的地などの複雑な航運航程を展開し、沿海、海外貿易を活性化させていたと言えるであろう。その結果、上海や寧波などの江南諸港においても華南や東南アジアの産物が集荷される状況にあった。康熙・雍正時代には上述の沿海・海外貿易の形態は進展し、出港地と目的地との単純で直線的な海上貿易の形態から漸次複雑な貿易形態へと推移する時代でもあったと言えるであろう。

【附記】

本稿は、2016年8月27日に上海・復旦大学歴史系主催の“明清以来江南經濟發展與社会變遷”国際學術研討会（8月27-28日）において報告した原稿に依拠したものである。

Shanghai and Ningbo of Coastal Shipping in the from the late Kangxi to
Yongzheng Era

Matsuura Akira

康熙雍正时代的上海・宁波沿海航运

松浦 章

摘要

在康熙23年（1684）“展海令”頒佈之後，清朝的沿海航運逐漸隆盛，海外貿易的迅速發展也在近年的研究成果中被廣為所知。展海令頒佈以後，推動中國沿海航運活動發展的主要力量是中國的帆船活動。特別是在福建等地建造的尖底型海船即鳥船、以及在長江口附近被廣為使用的平底型海船即沙船，二者極大促成了沿海航運活動的繁昌與以沿海為中心的遠距離航運的展開，也推動了以沿海航運為依託的物資流通。但是其具體的詳細情況仍未充分解明。

本報告即是以江南的上海・寧波的航運狀況為中心，參照日本方面史料，對康熙雍正時期中國沿海貿易的樣態予以解明。

關鍵字：清代 展海令 上海 寧波 沿海航運 日本史料

注

- 1) 郭松義・張澤咸『中國航運史』台灣・文津出版社，1997年7月，第五章，遠洋航運，國內航運，275-297頁參照。
- 2) 松浦章『清代上海沙船航運業史の研究』關西大學出版部，2004年11月。
松浦章『清代帆船沿海航運史の研究』關西大學出版部，2010年1月。
松浦章著，楊蕾・王亦鈔・董科翻譯『清代上海沙船航運業史研究』江蘇人民出版社，2012年5月。
- 3) 香坂昌紀「清代前期の沿海貿易に関する一考察―特に雍正間福建―天津間に行われていたものについて―」『文化』第35卷 第1・2号，1971年，28-65頁。
- 4) Ng Chin-keong, Trade and Society; The Amoy Network on the China Coast 1683-1735, National University of Singapore, 2015.
- 5) 清・葉夢珠撰，來新夏點校『閩世編』明清筆記叢書，上海古籍出版社，1981年6月，82頁。
- 6) 國立故宮博物院故宮文獻編輯委員會編『宮中檔康熙朝奏摺』第7輯，國立故宮博物院，1976年9月，116-117頁。

中国第一歴史檔案館編『康熙朝漢文硃批奏摺彙編』第7冊，檔案出版社，1985年5月，1048-1049頁。

- 7) 國立故宮博物院編『宮中檔雍正朝奏摺』第1輯，國立故宮博物院，1977年11月，628頁。
- 8) 國立故宮博物院編『宮中檔雍正朝奏摺』第4輯，國立故宮博物院，1978年2月，228頁。
- 9) 國立故宮博物院編『宮中檔雍正朝奏摺』第5輯，國立故宮博物院，1978年3月，864頁。
- 10) 國立故宮博物院編『宮中檔雍正朝奏摺』第6輯，國立故宮博物院，1978年4月，409頁。
- 11) 國立故宮博物院編『宮中檔雍正朝奏摺』第11輯，國立故宮博物院，1978年9月，916-917頁。
- 12) 榎一雄編『華夷變態』下冊，（財）東洋文庫，1959年3月。大庭脩編著『唐船進港回棹録・島原本唐人風説書・割符留帳』，関西大学東西学術研究所，1974年3月（全267頁，索引19頁），以下，大庭脩編『島原本唐人風説書』と略す。
- 13) 故宮博物院明清檔案部編『李煦奏摺』中華書局，1976年5月，17頁。
- 14) 榎一雄編『華夷變態』下冊，（財）東洋文庫，1959年3月，2771頁。
- 15) 大庭脩編『島原本唐人風説書』130頁。
- 16) 榎一雄編『華夷變態』下冊，2777頁。
- 17) 同書，2825頁。
- 18) 同書，2818頁。
- 19) 同書，2826頁。
- 20) 同書，2865頁。
- 21) 同書，2857頁。
- 22) 同書，2884頁。
- 23) 同書，2968頁。
- 24) 同書，2773頁。
- 25) 同書，2828頁。
- 26) 同書，2766頁。
- 27) 同書，2891頁。
- 28) 大庭脩編『島原本唐人風説書』127頁。
- 29) 榎一雄編『華夷變態』下冊，2829頁。
- 30) 同書，2865頁。
- 31) 大庭脩編『島原本唐人風説書』102頁。
- 32) 同書，105頁。
- 33) 同書，130頁。
- 34) 榎一雄編『華夷變態』下冊，2747頁。
- 35) 同書，2870頁。
- 36) 同書，2748-2749頁。
- 37) 同書，2755頁。
- 38) 同書，2756頁。

- 39) 同書, 2814頁。
- 40) 大庭脩編『島原本唐人風説書』109頁。
- 41) 榎一雄編『華夷變態』下冊, 2985頁。
- 42) 大庭脩編『島原本唐人風説書』121頁。
- 43) 同書, 121頁。
- 44) 同書, 106頁。
- 45) 同書, 112頁。
- 46) 同書, 111頁。
- 47) 同書, 123頁。
- 48) 同書, 124頁。
- 49) 松浦章『清代帆船沿海航運史の研究』関西大学出版部, 2010年1月, 407-421頁。
- 50) 榎一雄編『華夷變態』下冊, 2843頁。
- 51) 同書, 2976頁。
- 52) 大庭脩編『島原本唐人風説書』130頁。
- 53) 同書, 127-128頁。
- 54) 同書, 130頁。
- 55) 同書, 130頁。
- 56) 同書, 130頁。